

銀座 名バーテンダー物語

古川緑郎とバー「クール」の昭和史

伊藤精介



晶文社

著者について

伊藤精介（いとう・せいすけ）

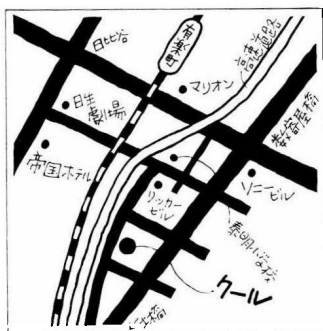
一九五〇年、東京・本郷生まれ。日本大学芸術学部卒業。八〇年より約五年間、『ブルータス』誌のフリー・エディター&ライター。

『クール』

東京都中央区銀座7丁目2番14号

TEL (571) 2604

(573) 2410



銀座 ぎんざ 名バ めいーテンター物語 ものがたり

古川緑郎とバー「クール」の昭和史

一九八九年一月一〇日初版

一九八九年二月一五日二刷

著者 伊藤精介

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二丁目二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

あづま堂印刷・美行製本

© 1989 Seisuke ITO

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします。

銀座 名バーテンダー物語

古川緑郎とバー「クール」の昭和史

伊藤精介



晶文社

ブックデザイン
平野甲賀

銀座名バーテンダー物語 目次

プロローグ——「いらっしやいまし」

11

第一章 昭和四年の“少年ボーイ”

22

第二章 親方は“シェイクの音”

39

第三章 フェリス女学院と西川ピアノ

63

第四章 伝説の本格バー『カフェ・ド・パリ』

94

第五章 ウイスキー疎開

112

第六章 スピーク・イージ

128

第七章 『クール』開店 148

第八章 脚線美コンテストと白浪五人男 168

第九章 お嬢さま、お手をどうぞ 200

第十章 ⑥ 柶は緑色 219

第十二章 カクテルは空想とエピソードに包まれて 234

エピローグ——「いつてらっしゃいまし」 250





前頁写真

『クール』店内。左から、根岸五郎，中村豊雄，古川緑郎。
(撮影・本橋成一)

プロローグ——「いらっしやいまし」

夕方五時きっかり、『クール』の緑^{ペパーミント・グリーン}色の看板に明かりがともる。
まず、一分と遅れたことがない。

古川緑郎さんのバー『クール』は、銀座七丁目の西の端にある。数寄屋橋公園の脇を新橋方向に百メートルほど歩いて右に折れ、泰明小学校を右手に見ながらさらに百メートルほど進むと、首都高速八号線の下につくられたショッピング街にぶつかる。コリドー街と名づけられたこの新興の商店街に沿ってなおも土橋方向に数ブロック歩くと、左側に、緑色の地に白抜きで「クール」という文字の浮き出た小さな看板が見えてくる。

黄昏どき、この界限にはどこか気怠い空気が漂う。昼と夜の狭間の、一瞬静止したような空

白の時間帯——。

昼間の人種はそろそろ仕事の区切れ目を気にしはじめ、その何割かはふつと窓の外に目をや
つてその夜の出没先などに想いをめぐらす。片や夜の人種は、これから始まる喧噪の空間に向
けて気合いを入れていく、そんな時間帯。そして、昼の人種も夜の人種もみなが一瞬、無口に
なり、なぜだかはわからないのだけれども自分自身を見詰め返すような、そんな不思議な時間
帯——。

あるいはまた、それは「女が階段を上る時間帯」と言い換えてもいい。

昭和三十五年、成瀬巳喜男監督、高峰秀子主演の『女が階段を上る時』という映画が製作さ
れた。夜の銀座の女たちを描いた作品である。僕はこの映画を見ていないけれども、そのタイ
トルにこめられたニュアンスは十分に想像がつく。それは、こんなイメージだ。

銀座の雑居ビルの三階か四階あたりに小さなバーを構えるママが、黄昏どき、香水の匂いを
漂わせ、着物の裾を小刻みにパタパタいわせながら自分の店に向かって階段を上がっていく光
景。彼女はこの階段を一段ずつ踏みしめながら、その夜の闘いに対する臨戦態勢に入っていく
わけだ。やがて自分の店の前に立つ。アップにした髪のようなじの部分をもう一度撫であげ、襟
元に軽く手をやり、ふつと一呼吸おいてから扉に手をかける——。

いまなら、さしづめ「女がエレベーターで上がる時」とでもいうのだろうが、いずれにせよ、

そういったなんともいえない趣きのある銀座七丁目の黄昏どき、僕は時間を見つけてはテープレコーダーを携えて『クール』を訪れてきた。

そんなとき、僕はたいてい『クール』のちよつと手前で立ち止まり、高速道路越しに、夏だったらまだ十分に明るい、冬だったらすでに薄暗くなりはじめた空を見上げる。東京で一番早く建設されたこの高速道路の下には、かつて外濠が流れ、それに沿って走っていた高架鉄道の、その赤レンガ積みのアーチ模様が水面に映っていたという。その光景を僕は知らない。

戦前、銀座は四方を川と濠によって囲まれた「水の街」だった。京橋とか新橋とか数寄屋橋とか三原橋といった地名がその面影を残している。が、戦後、それらの川や濠は次々と埋め立てられ、それらに代わって高速道路が銀座八丁を包囲してしまった……。

『クール』は、ポールスタービルという雑居ビルの一階に店を構えている。外壁は赤レンガ造り。

透明な硝子を嵌め込んだ木製のドアを押しあけて店内に一步入ると、

「まあまあ、いらっしやいまし」

と古川さんの奥さまの富久子夫人と、やはり長年、古川さんの良きパートナー役を果たしてきた奥さまの妹のミキ子さんがにこやかに迎えてくれる。

「マスター、伊藤さんですよ」

とママはカウンターのなかの古川さんに声をかける。

「あ、いらつしやいまし」

古川さんもまた、いつも変わらぬ温和な笑顔で迎えてくれる。この十一月で満七十二歳。昭和四年（一九二九年）から六十年近く、こうして銀座のバーに立ちつづけてきたせいかな最近はいぶ足腰が弱くなられたようだけど、それを除けば、端整な顔立ち、どこか茶目つ気のある眼差しと、年齢をとるならこんなふうにとりたいと思わせずにおかない素敵な老紳士である。

バーテンダーは、古川さんの他に二人。「クール」に来て十年になる中村豊雄さんと、富久子夫人の弟で銀座のバーでの経験豊富な根岸五郎さんの二人である。白いYシャツに蝶ネクタイ、その上にグレーかベージュかえび茶色のウールのチョッキというスタイル。古川さんもほぼ同じ恰好だが、ただし蝶ネクタイではなく、ふつうのネクタイを締めている。夏でも冬でも一年を通してこのスタイルだ。

店内は十四坪ほど。入って左手に木製のテーブルと椅子も用意されているが、常連客は椅子席には腰掛けず、ためらうことなく右手のスタンド形式のカウンターの前に立つ。こういった昔ながらの立ち飲みスタイルを守りつづけているバーは、最近ではほとんど見られなくなってしまう。僕の知る限りでは、横浜・常盤町の『パリ』、神戸・三宮の『ハイボール』ぐらいし

が残っていない。が、戦前はむしろこれが正統派だったのだ。

もうひとつ、内装の形式に関して触れておきたいことがある。入ってすぐのところに、帽子やコートや鞆を掛けるスタンドが置かれていることだ。客が入ってくると、フロアに立っている富久子夫人かミキ子さんがスツと近寄り、「お預かりしましょう」といってコートとか鞆をそのスタンドに掛けてくれる。おかげで客は、すっきりした気分でカウンスターの前に立つことができる。夜霧に濡れたトレンチコートの襟を立ててカウンスターに片肘つくのが粋なのだ、などと勘違いしているエセ・ハードボイルドは、この店では通用しない。

メニューは完璧に洋酒だけ。ビール、日本酒、ワインの類は一切置いていない。おつまみもナッツとかチーズ程度。それに加えて、BGMも、若い女性のサービスマネージャーもいない。要するにお客は、カウンスターの前に立って、飲んで、バーテンダーと雑談して、そして帰っていくという、実にストイックなバーなのだ。

開店時刻の五時をちよつとまわったばかりだというのに、必ずといっていいほど常連客が一人か二人カウンスターにもたれてすでにカクテルなどを啜っている。僕はたいてい窓際の指定席に陣取り、暮れなずむ通りの風景を時折り眺めながら古川さんの語りに耳を傾ける。もちろんそれは、昭和の初めから戦前・戦中・戦後の混乱期をくぐり抜けて今日に至る酒場の昭和史で